

四川省奥地の街、理塘郊外にある怪しい鍾乳洞の岩山への再訪……。うっかり忘れていたくらい数年越しの願いが叶うとあり、喜びと期待に胸を弾ませていた私ではあるが、車が街から離れるにつれて薄っすらと不安も頭をもたげて来た。ある程度運転手の人柄も見定めた上で乗り込んだとはいえ、やはり郊外に出向くタクシーの中に女一人で乗っているのは、あまり気持ちの良い物ではない。

やっぱりさっき宿で見かけた日本人に声をかければ良かったなー。だがそっと伺い見た小柄なコメディアンのような容貌の運転手は、そんな私の心中など露知らず、ステレオから流れてくる陽気な歌謡曲を口ずさみながら身体を揺すり、半ば踊りながらハンドルを握っている。悪気のかけらもなさそうな運転手の様子に思わず苦笑がもれた。これなら大丈夫そうだ。だが、それにしたって自身の安全の為にもこの道中を楽しく過す為にも、彼と仲良くなっておくに越した事はない。

運転手の歌に合わせて助手席の私も一緒に踊り、「中国の歌なら私も唄えるよ!!」と頼まれもしないのに自分の歌声まで披露して、二人しか乗ってないのにやたらと賑やかな車は、程なくして見覚えのある岩山の前に到着した。岩山に至る小道の入口にはツノ付き牛のしゃれこうべが積み上げられ、白く乾いた骨の山に巻きつけられた色とりどりのタルチョが風に吹かれている……。怪しい。そんなチベット仏教のどこか怪しい雰囲気は大好きだ。

うわわわわわ〜〜い!!!

弾む気持ちを押しきれずに岩山の側面に口を開けている、洞窟の入り口まで駆け上がった。ワクワクしながら暗い鍾乳洞の中を潜り抜け、岩山の向こうに顔を出すと、眼下には先ほど車で走ってきた道路がどこまでも続いていくのが見える。

ばんざーい!!! 本当に此処に戻って来れたんだ!!

アリの巣のように枝分かれした洞窟内を好きに見て回っていると、後からやって来た運転手が「ダメダメ! ここはこっち側から入って向こうに抜けなくちゃ」とか「この穴はこっちから入って足から上の穴が抜けられたら幸運が付くんだ」などと解説してくれる。なるほど怪しい神山だけあって、岩山のあちこちに色々と言い伝え

やいわくがあるらしい。そんな解説が聞けるのも地元の人と一緒にならではだ。言われたとおりに穴をくぐろうとしてみたが、幸運を手にするのはやはりそう簡単にはいかないらしい。あまりに厳しい体勢を強いられて私はあっさり諦めたが、お供で来た筈の運転手はいつの間にか私より熱心になって、服を汚し額に汗を浮かべて頑張っている。

手前の洞窟をじっくり見て回った後は更に山の奥に進み、陽気なガイドは先に立って山のあちこちにある岩穴を案内しては、ここでこれができたら一生平安、ここでこうすれば一族繁栄など、その場その場での課題を解説してくれる。途中、両親と娘で遊びに来ていたチベット服姿の三人家族と合流し、総勢5名でわあわあ騒ぎながら、平安や繁栄を願い代わるがわるに岩穴を登ったり潜ったり、地面の穴に手を突っ込んでみたりした。

大人の手がやっと差し込める、<sup>ひじ</sup>肘丈程の深さのその穴は、誰がいつ入れたのかビー玉や髪飾り、薄汚れたりボンヤその他の小物が仕込んであり、何がつかみ出せたかで今後の運勢を占えるのだそうだ。言ってみればおみくじのようなものだが、取り出した小物が何を意味するのか明記されている訳でもなく、私とチベット家族はどう見ても適当に喋っている感じの運転手の解釈を聞いてお茶を濁し、彼自身は穴の中から汚れた少額紙幣をつかみ出して「こりゃ金運がいい運勢だ!」と勝手に喜んでた。

岩山のほぼ山頂にあった穴おみくじが終了すると、お参りポイントも尽きたようで、そのまま山の裏手に下り裾野をグルッと半周して出発点に戻ると、このちょっとおかしい岩山<sup>もうで</sup>詣も終了した。陽気なガイドのお蔭で思った以上に楽しんでしまい大満足である。

チベット家族と別れて再び車に乗り込んだ私達は、先ほど走ってきた道を理塘の街に向かって引き返し始めた。太陽は上空高く輝いていて、一日はまだ長い。せっかく運転手とも仲良くなった事だし、これで帰ってしまうのは物足りなく思っていたところに、運転手の方も「他にほの場所はないのか?」と商売っ気を出してくる。「ゴンパ(寺)はどうだい?」だがお寺は既に北京軍団と一緒に訪れていたし、理塘の事など殆ど知らないのに、行きたい場所なんて・・・と、思ったところで突然、

稲城最後の夜、一緒に夕食を食べたリー・ルー・ハイの言葉が閃いた。

「稲城の人間が死んだ時、遺体は理塘に運ぶんだ・・・」

「ねえ、チベット族が亡くなったら、その身体は鳥にあげるんでしょう!？」

運転手は突然何を言い出すのか?と言った顔をしてみせたが、「そうさ」と頷いた。

「その場所が理塘にあるって聞いたんだけど、あなたの車で連れて行ってもらえる？」

「20元だな」

「お得意様なんだから、まけなさいよ! 10元ね!？」

せっかく掴まえたお客を逃したくないのと、岩山詣で仲良くなってしまった弱みなのか、運転手は苦笑しながら頷いた。

一旦理塘の街なかに戻ったタクシーは、そのまま街の中心を横切るように通り抜けると茶色いチベット式住居の密集する街の裏側に出た。通りを少し走るとじきに民家も尽きて、あとは丘陵と草原が広がっているだけだ。運転手は

「もうすぐだぜ小姐、あんた恐くないのか?」とわざと脅すような口調で話しかけてくるが、目に入ってくるのは高い青空と緑の絨毯につつまれた明るい草原である。「ゼーンゼン」私は笑いながら首を振った。

しばらく行くと道の正面には草原が小高く盛り上がった丘があり、そこで道は終わっていた。少し離れた丘の斜面に祈禱旗の一種である布が張ってある以外、その場には特に宗教的な儀式を意味するような物もなく、ただ三方を緩やかな丘に囲まれた草原地帯が広がっているだけだ。

「ここなの？」

ちょっと拍子抜けしたような気分にもなった私だが、車を降り正面の丘に向かって歩いていく運転手に付いて辺りを散策していると、突然運転手が脅かすような声色で言った。

「小姐、見てみろよ。あんたが今立ってる場所に散らばってるのは人の骨だぞ、ひいひい〜」

え! ?思わず足元を見おろすと、確かに私の足下の地面には白い陶器が砕けたような、小さな小さな破片がたくさん散らばっている。

「これ人の骨なの!？」

「そうさ、鳥が食べ易いように細かく砕いた人間の骨のかけらだよ、恐いかい?・・・うひひひ・・・」

理屈ではそこが何処だか判っていても、日本人的な感覚として運転手の言葉が俄かには信じられず、私はその場にしゃがみ込んでしげしげと小さな白い破片を見つめた。小さな白いカケラの質感は、やはり陶器などではなく骨片のようだ。いや、そこが鳥葬場である以上、骨以外の物が散らばっている方が珍しい筈で、やはりそれは間違いなく人骨の破片なのだ。

これが日本の話であれば、そんな物が野山に散らばっているなど考えられない事で、もし仮に見つければ即刑事事件に発展しての大騒ぎになるだろう。それを思うと不思議な気持ちはしたが、白く乾いた小さな骨片から生命の名残のような物は全く感じられず、そこには恐怖も畏怖も嫌悪もなかった。

私の足下に野晒しになって散らばっている骨の破片は、今となってはその遺族にさえ特別な意味など持たない、ただのカルシウムの塊なのだ。こうして風に吹かれ雨に溶かされ、いずれ地面に吸収されていくのだろう。鳥の餌となり空に舞い上がった肉體も、やがては形を変えて地表に帰ってくる。自然から与えられた肉體は役割を終えると再び自然に還され、後には何も残らない・・・これまで知識として頭の中にはあっても、現実味の感じられなかった鳥葬の存在に初めて直面した私には、その潔さと儂さは好ましいものとして感じられた。結局人間なんて、何だかんだ言っても自然の一部であり、この地球の上で生かされている動物の一種に過ぎないのだ。それがこれほど強く意識されたのはこの時が初めてだった。

骨の存在に気付いてから気をつけて地面を見ていると、あちこちにそんな骨片が固まってちらばっている場所がある。その脇には理塘寺の門前で見かけたような、経文の掘り込まれたマニ石が草の上に置かれている場所もあった。

「ほら、見てみなよ」

運転手が指さした地面には大きな鳥の羽が落ちていた。

「こいつらが人間を食べるんだぜ」

抜け落ちていた羽は50センチ程もあり、その大きさからすれば、ずいぶん大きな鳥に違いない。しかし、空を見渡してみても見えるのは青空に浮かぶ白い雲ばかり

りで、そんな鳥がこの辺りに沢山いる気配は感じられなかった。

しばらくその場を歩きまわっていると、いかにも腰掛けるのに具合の良さそうにてっぺんの窪んだ円柱形の石が立っているのが目に入り、朝から歩き続けて気付けば結構くたびれていた私が、吸い寄せられるように石に近づき腰掛けようとしたその時、運転手が大声を上げた、

「小姐！そこに座っちゃダメだー！！」

思わず飛びのくように落しかけた腰を跳ね上げると、運転手が言った。

「その石は人間の頭蓋骨を載せて、砕く場所なんだぞ」

成るほど・・・石のてっぺんがちょうどすり鉢のように窪んでいるのはそんな訳だったのか・・・周りをみまわすとところどころに同じようにゆるく窪みのついた石があるのが目についた。

一見ただの草原の丘陵地帯にしか見えなかったその場所も、細かく観察していると、確かにそこが鳥葬場なのだという事実が序々に実感として伝わってくる。突然頭上でバサバサッと大きな羽音が響いてビクっとした私が空を見上げると、動物園でしか見た事が無いような大きな鳥が一羽、むこうの空に飛び去って行くのが見えた。

そんな時である。私達が先ほど走ってきた道を一台の乗用車がやってくるのが見えた。道はこの鳥葬場で行き止まりだし、もう午後遅い時間だ。今頃いったい何をしにやって来るのだろう。停車した車からは一人の僧侶と2、3人の男達が降りてきた。私達の立っている鳥葬場の丘に登ってくると僧侶は何やらおまじないのような仕草をしていたが、じきに一緒に来ていた男達が地面に杭を打ち込み、僧侶はお経を唱え始めた。「彼等はいったい何をしてるの？」私が尋ねると「鳥葬の場所を決めてるんだ」運転手は言った。僧侶が占いで良い場所を選び、その場所の目印に杭を打ち込んでいるのだという。

「え！？じゃあその葬儀はいつやるの!？」

「それは俺には判らないさ、明日なのか一週間後か」

だが鳥葬は確かにこの数日間のうちに行われるのだ。さっきまではこの場に来られた事だけで満足していた私は、それを知ったとたんに、この目で実際に鳥葬を見てみたいという思いが強烈に湧きあがっていた。

僧侶がお経を唱え終り、草の上に腰掛けて一休みしていた彼等に運転手が話しかけた。チベット語で交わされている会話の内容は私には全く解らない。彼等が話している間、私は僧侶を連れてやってきた男達の姿を観察した。

亡くなった人の遺族だろうか？運転手と話している男の姿はツバのある帽子をかぶり、ブーツにジーンズと、そのいでたちはやはりカーボーイ風だ。腰には30センチほどもある大きな短刀の黒い鞘をぶら下げているのが目をひいた。浅黒い顔は強面だが話している表情や目が優しい。以前同じ職場で働いていた外国人の友人と面影が重なるところがあり、既に帰国した友人の事などをぼんやり思い出していると、彼等と話していた運転手が突然私に向かって言った。

「小姐、彼等の葬儀は明日らしい。明朝ここにすれば、鳥葬がみられるぜ」(次号に続く)